

Yamato River

# 大和川

## 流域委員会ニュース

No.2



大和川クリーンキャンペーン2004「写真の部」入賞作品

### 第5回・第6回・第7回大和川流域委員会が開催されました。

#### これまでに開催された会議

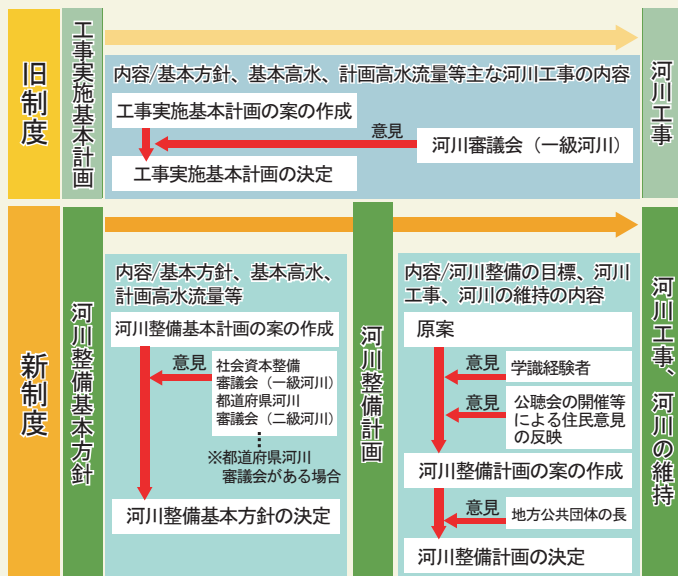
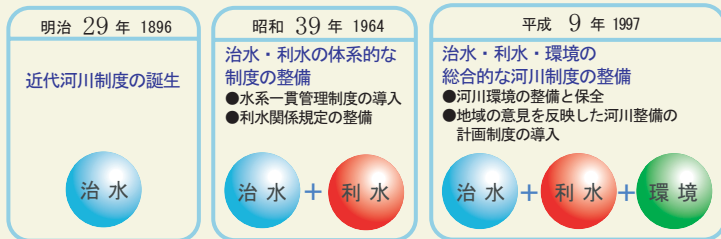
- |                  |                |                      |                     |
|------------------|----------------|----------------------|---------------------|
| ○ 大和川流域委員会設立会    | 平成16年 5月29日(土) | ○ 第6回大和川流域委員会        | 平成17年 6月14日(火)      |
| ○ 第1回大和川流域委員会    | 平成16年 5月29日(土) | ○ 第7回大和川流域委員会        | 平成17年 9月 1日(木)      |
| ○ 第2回大和川流域委員会    | 平成16年 8月25日(水) | ○ 第8回大和川流域委員会        | 平成17年10月14日(金)      |
| ○ 現地視察会 (平成16年度) | 平成16年 9月28日(火) | ○ 現地視察会 (平成17年度)     | 平成17年11月22日(火)      |
| ○ 第3回大和川流域委員会    | 平成16年11月29日(月) | ○ 第9回大和川流域委員会        | 平成17年12月21日(水)      |
| ○ 第4回大和川流域委員会    | 平成17年 1月28日(金) | (本号では第7回までを取り上げています) |                     |
| ○ 第5回大和川流域委員会    | 平成17年 3月14日(月) | ● 第10回大和川流域委員会       | 平成18年 2月15日(水) (予定) |

# 大和川流域委員会の概要

## 大和川流域委員会とは

国土交通省では、平成9年の河川法改正に伴い、「河川整備基本方針」、「河川整備計画」を策定することとなりました。

大和川流域委員会は、今後20～30年間の具体的な河川の整備内容を示す河川整備計画を策定するにあたり、学識経験者等から意見を頂くことを目的として、平成16年5月に設置されました。



## 大和川流域委員会委員名簿 (五十音順、敬称略)

氏名	所属	分野
伊藤 忠通	奈良県立大学地域創造学部教授	経済
(委員長) 井上 和也	京都大学名誉教授	河川工学
沖村 孝	神戸大学都市安全研究センター教授	地盤工学
萩野 芳彦	大阪府立大学名誉教授	農業水利、水資源環境工学
加我 宏之	大阪府立大学大学院 生命環境科学研究科助手	緑地計画、景観計画
黒田 伊彦	関西大学文学部非常勤講師	歴史、教育、地域活動
小松 清生	堺市立錦小学校教諭	教育、歴史
椎葉 充晴	京都大学大学院地球環境学学術助教授	水文学、水資源工学
千田 稔	国際日本文化研究センター教授 人文地理学会会長 奈良県立図書館館長	歴史地理学
谷 幸三	大阪産業大学 人間環境学部都市環境学科非常勤講師	水生生物の分類と生態、 環境教育
中川 一	京都大学防災研究所流域災害研究センター 河川防災システム研究領域教授	治水(土砂移動)
仲川 政成	橿原市五井町総代 五井町自主防災会会長	地域の歴史、地域活動
前迫 ゆり	奈良佐佐短期大学 情報メディアセンター長・教授	植物生態学、保全生態学
森下 郁子	社団法人 淡水生物研究所所長	生態系
(委員長代理) 山下 淳	同志社大学政策学部/大学院 総合政策科学研究科教授	法律
米田 稔	京都大学工学研究科 都市環境工学専攻助教授	環境工学(水質、土壌汚染、 環境リスク解析)
和田 翠	京都教育大学教授 奈良県立橿原考古学研究所指導研究員	日本古代史

## 第5回大和川流域委員会

開催日時：平成17年3月14日(月)13:00～16:00

場所：王寺地域交流センターリーベル王寺東館5階

委員出席数：出席15名、欠席2名

### (1) 委員からの情報提供「空間利用」、「環境」

(a) 黒田委員：前回問題になった古代の大和川にアユがいたかどうかについて、万葉集に初瀬川のアユがうたわれていることから、生息していたことがわかる。

「子どもたちによる矢田地区の大和川河川敷自然公園づくりについて」

矢田地区の大和川河川敷自然公園は、子供たちの主体的な活動が、周りを動かした。「子どもが変われば、親が変わり、親が変われば、地域が変わる」という状況が作り出されてきた。地域と結びついた学校教育との視点を重視しながら、空間利用、環境問題を考えて欲しい。

(b) 小松委員：「大和川学習と子どもたち」

大和川での学習を通じて、子どもたちが川への興味や願いを持ち、地理、歴史、そして環境への関心を持ち始めることを期待している。「ワースト1」という不利な条件も大和川学習の取り組みのエネルギーになっている。300周年の盛り上がりを確かなものにしていくため、市民のグループ作りを広げたい。瀬と淵浄化施設を堺に設置して、子どもたちが川で遊べる拠点にしたい。

### (2) 大和川の現状説明「利水」

河川管理者から「利水」についての大和川の現状説明がなされた。



### (3) 大和川の「空間利用、環境、利水」についての意見交換

#### (a) 空間利用

- ・川をきれいにしようと思うときに、人の暮らしというもの継続的に反映されていないと持続的なきれいさは望めない。御渡りが復活され、継続的に行われれば、神事に関する川だからきれいにしようという人の意識が働くのではないか。ぜひ継続的な復活が望まれるというふうに感じた。神事が途切れるような要因というのは何か。国交省で支援できることは是非していただきたい。
- ・御渡りの神事は、担ぎ手の減少など、神社や地域の事情により中断されたと思われる。
- ・河川管理者としては川に入りやすい低水護岸の設置等、御渡りが継続的に実施されるよう治水に影響を与えない範囲内の支援としては検討していきたい。

#### (b) 環境

- ・川というのはおそらく洪水と濁水という大きな二つの攪乱要因があり生態系だと攪乱というもの一つの生物群集を維持する要因にもなっている。濁水によって生物相が大きく変わったという情報があれば教えていただきたい。
- ・岸寄りに草があるので川の中の生物は流されにくい。流されたとしても遡上して全体の現存量はあまり変わらない。生物にとって大切なのは早瀬、平瀬、淵があることだと思う。

#### (c) 利水

- ・水質の問題で閉鎖された浅香山の浄水場が大和川の水質浄化に伴い復活することが淀川に対する利水の負担を小さくするという事もある。このことの見通しについて教えて欲しい。
- ・見通しについては何も申し上げることはありませんが、水道の水源になりうるほどの水質に復活したいという話があったということです。使うかどうかは市民の方や水道事業者の判断で決めることだと思います。現在は、大和川流域に暮らしている人は他の水系のダムや琵琶湖の水を飲んでいるということです。
- ・大和川水系全体の慣行水利権、許可水利権については全体を整理したほうが後々参考になると思う。
- ・桜井市の上水源である初瀬ダムの水質や土砂の堆砂状況はどうなっているのか。

- ・初瀬ダムは現在、水道水源として問題になる水質状況ではない。堆砂も想定以上に大幅に進んでいるという状況ではない。むしろ天理ダムのアオコの発生や堆砂の進行が問題となっており、対応を検討中である。
- ・慣行水利権の許可水利権への切り替えは大和川水系でどの程度進んでいるのか、利水管理の点から現状を教えて欲しい。
- ・市街化が進んで、水田が減少している流域の土地利用の変化に応じて必要な水の量も変わってきていると思われる。水利用の量を現在だけ取り上げて提出するのではなくて、水の利用量がこれに応じてどう変わってきたかというようなことを対応させないと、これから今のままでいいのかわかるかということが見えてこないと思う。
- ・柏原地点で濁水流量がふえてきているように見えるが、奈良県域の土地利用の変遷によるものなのか、そのほかの原因が考えられるかとかを少し検討しないと、将来の大和川の利水の状況がこれでいいのかわからないかという見えないかと思う。
- ・水利用に関しては、流域全体として利水に関する水収支のような図にした方がわかりやすい。
- ・水の需要と利用の現状がどういう状況なのか、将来の利水を考えるうえで有用な情報になる資料があれば教えて欲しい。

#### (d) 利水と治水

- ・条里制に基づき形成された土地利用や巧妙な河川利用の形態が増水時に冠水の原因となっているケースが多いと思う。
- ・環濠集落特有の「請堤」が最近不用意に壊されることが多くなっている。奈良盆地の治水を考えるうえで、洪水を遊水させる請堤は非常に重要であり、この点を再認識する必要がある。
- ・奈良盆地の周辺でかなり大規模な圃場整備事業がされているが、地形を見ても元来土石流が起こりやすい地区もあり、その可能性を危惧する。
- ・ダムの堆砂の問題は利水、治水の両方に絡んでくる。現状の堆砂状況や経緯に関する情報が必要である。



第5回大和川流域委員会

## 第6回大和川流域委員会

開催日時：平成17年6月14日(火) 15:00~18:00  
場 所：王寺地域交流センターリーベル王寺東館5階  
委員出席数：出席14名、欠席3名

### (1) 委員からの情報提供「環境」、「利水」

#### (a) 森下委員：「大和川にすんでいる魚の環境条件」

大和川は、高い山がなく里山の川で始まって里山の川から都市河川で終わるといような中流域の特性が特に目立ち、昔から多くの人々が住んできた川であり、それに伴う川の汚れに対応できるような魚が多いことである。歴史的に見ても今は、最も水質が綺麗な状態であり、水質の努力目標はあまり無理せず、ほどほどとして良いと思う。また、紀の川に比べ、大和川は外来種が定着しやすい特徴があり、他の河川よりも外来種について注意をする必要がある。

#### (b) 仲川委員：「大和平野の利水と吉野川分水について」

大和川流域は、「大和豊年米食わず」の言葉に見られるように、降雨量が少ない地方であり溜池や隠し井戸、井堰で農業用水を確保してきた。一方、吉野川流域は雨量が多いが河川の水は和歌山県に流れていく。このため、300年前から吉野川分水が考えられ、昭和31年7月に「十津川・紀の川総合開発事業」により悲願の分水が開始された。

### (2) 大和川の現状説明「治水①」

河川管理者から「治水①」についての大和川の現状説明がなされた。

### (3) 大和川の「環境、利水、治水」についての意見交換

#### (a) 環境

- ・魚出現種は外来種が目立つ。河川改修が進めば外来種がすみやすくなり、また魚のハビタットの多様性の確保が難しい川になるのではないかと。治水と生物多様性の折り合いをどのように考えていけばよいか。
- ・砂の動きがなくなっていることが、日本在来の魚が卵を産めない条件をつくっている。大和川の河床は硬く、産卵などに砂の間隙を利用する魚類がすみにくくなっている。また水質が悪いことは有機物が間隙を埋めることになり、間隙が目づまりを起こすことで、さらにハビタットとしての機能が失われている。
- ・洪水により河床が毎年変動することが、魚が卵を産む気にさせるきっかけとなる。したがって洪水を全部制御してしまうと魚が卵を産むきっかけを無くしてしまうことになる。大和川では砂が常に変動していることが大事であり、生き物にとって良い環境が保たれているかどうかの目安になる。
- ・河床変動に一番大きく効いているのは昭和30~40年代にかけての砂利採取ではないか。砂利採取がなくなり河床変動が比較のおだやかになっていると思う。ほ場整備や河川改修などが原因で砂の動きや侵食が起きにくくなっていると思われる。また、川の中のヨシが茂りすぎて、洪水によって侵食がされにくく、土砂の供給を止めていると思う。
- ・流域の中で土砂生産の量がどうなのかというのは重要である。奈良県内では、造林が進み土砂が流出しにくくなった。ほ場整備ばかりが原因ではないと思う。
- ・木津川では中州が高くなってたくさん砂があるようにみえる。しかし、もっとも大事なのは0.2mm~2mm程度のものであるが、現状は2mm以上ばかりである。これでは小さな卵を産む魚の卵が下流に流されやすい。
- ・アユモドキ、ホトケドジョウ等は、川と水田を行き来し、水田のところで産卵する魚類である。昔は川と水田のつながりがあったが、今は三面張りなどにより行き来がしにくくなっている。
- ・魚出現種は昭和30年頃から現在までのデータをまとめてある。アユモドキやホトケドジョウ等がないということを実証するのは難しいが、今はないと思う。川と水田のつながりが無くなっているのは大和川の農業の特性でもある。井堰からの取水を千年近く続けてきており、昔から横断方向のつながりが少ないのではないかと。



第6回大和川流域委員会

- ・全体が里山の川であるということや、水質の努力目標もこの程度でよいといった意見に共感できる。そうした中で、せめて遊べる川にしたいという目標を立てて、「川とあそぼう大和川クラブ」を発足させた。そこに葦船学校を大和川でやりたいという声が上がリ、堺市の後援も得て大和川まつりでの開催を目指して準備中である。アシの適正な管理の実践による環境学習も視野に入れた葦船プロジェクトという発想はどうだろうか。
- ・舟運は文化であり、地域の方が築いていくものだと思う。大和川は水量が少なく、舟運ができるという時代は余りなかったのではないかと。大和川のように平地の川は古代の交通路になりにくかった。大和川には大和川としての漁法というのがない。要するに漁業が成り立つほどの魚がいなかったからではないか。川と遊ぶのは人間の本能であり、川で遊ぶ、付合う方法は何であってもいいのではないかと。川で遊ぶためにキャッチフリーズがあるようなのが大和川流域の人の文化というのはいかがかな。しかし、もしキャッチフリーズを作るのであれば、「古い都を流れる国際河川」というのはどうか。

#### (b) 利水

- ・奈良県では溜池が非常に多く、一町池や二町池のほとんどは江戸中頃に作られたものである。唐古池は遺跡と結びついて話題になったが、これも元禄16年に掘削されたものである。
- ・奈良盆地の井堰は歴史的に古くから利用されており、飛鳥では7世紀後半くらいまでさかのぼるものがある。
- ・溜池は、集中豪雨時などに保水能力を発揮する点で重要だと思うが、分水後は溜池の埋め立てが増えている。どれくらい埋め立てが進んでいるかというデータを示して欲しい。

#### (c) 治水

- ・昭和28年の降雨波形で決められた柏原地点の基本高水流量は、昭和57年8月の実績流量と倍近く違うことについて説明をお願いしたい。
- ・柏原の基本高水流量5,200m<sup>3</sup>/sというのは非常に大きな数値であり、王寺との流量の差は石川からの流入量が原因であることから、計画のハイドロは王寺と柏原の2地点を表示して欲しい。
- ・2日雨量というのは支川にとってあまり適当な雨量ではないと思う。支川についてどう考えていくか、検討されたものがあれば提示して欲しい。
- ・流下能力縦断図は重要な図であるので、計算手法や出発水位等の計算根拠を説明して欲しい。
- ・奈良県の支川の治水安全度は1/10、1/15程度で、直轄区間の治水安全度1/200と比べると差があり違和感を感じる。
- ・基本高水流量5,200m<sup>3</sup>/sについて流域委員会で議論の対象とするのか。
- ・個人的な意見だが、河川整備基本方針は流域委員会が関わるところではないと思う。
- ・治水的に見て、奈良県側と大阪府側では川の性格が違っていると思われる。特に王寺から上流は、河川網のようになっており治水の方法も形態が変わると思われる。大和盆地で実施されている総合治水の具体的な内容、施策について、具体例や写真等を見せて欲しい。



- ・王寺と柏原の2地点の計画のハイドロ、支川を含めた計画、流下能力の計算根拠、本川と支川の治水安全度の考え方の整理、及び総合治水対策の考え方について、次回以降の流域委員会で提示し説明する。
- ・治水計画では、通常、河床変動を考慮しないものであるが、河床の掘削によりどの程度流下能力が向上するのか、掘削土量はどの程度で、計画河床まで掘ったとして何年でどれくらい堆積するか等の検討が必要である。
- ・河川への土砂の堆積量の変化や浚渫工事を、どこでどのくらいやっているかについてのデータも示して欲しい。

- ・土砂動態のデータを揃えるのは大変な作業であるが、治水計画を立てるうえで土砂動態を把握することは重要である。
- ・淀川では既往最大対応とし、それを越える洪水をどのように対処するか議論に移っており、大和川もその方向で考えた方が良くはないか。国交省と大阪府と奈良県がきちんと整合性をとって議論していくことが必要である。
- ・ $5,200\text{m}^3/\text{s}$ は目指すべき目標として持っておくことなのかもしれないし、その辺は説明していただく必要がある。

## 第7回大和川流域委員会

開催日時：平成17年9月1日(木) 15:00~18:00

場 所：大阪厚生年金会館ウェルシティ大阪7階(フロールAB)

委員出席数：出席13名、欠席4名

### (1) 委員からの情報提供「治水」

(a) 沖村委員：「大和川の河床変動の経過と亀の瀬地すべりによるダムアップの可能性について」

最近、大和川の河床は比較的安定しており、現在の大和川は動的平衡状態にあるものと考えられる。地すべりはゆっくり動くので、ダムアップの可能性は少ない。また、ダムアップの高さが7~8mまでは上流の王寺市街地への影響はない。

(b) 黒田委員：「1982年の大阪・矢田・堺・松原市域の大水害について」

1982年の水害は、出水期における水門工事の為の堤防切開部からの逆流が原因である。宅地等の乱開発により森林や溜池の保水能力が低下し、内水氾濫となった。総合治水対策については住民の同意を得ることが必要である。「大和川サミット」では、府県を越えた対立状況を住民参加によって解決させていった。これから策定する整備計画に、この教訓を活かして欲しい。

### (2) 大和川の現状説明「治水②」

河川管理者から「治水②」についての大和川の現状説明がなされた。

### (3) 大和川の「利水、治水」についての意見交換

(a) 環境と治水

- ・河川構造物による生態系への影響として、ある種の魚は変動傾向が見られる。生物多様性に配慮した治水を探っていただきたい。
- ・刈り取りによる生物多様性の維持、生態系の保全を探っていただきたい。住民も刈り取りに協力していただき、住民の輪を広げる取り組みをしていくことが、生態系保全と治水につながる。

(b) 治水

- ・柏原堰堤で昭和7年から昭和28年にかけて1mほど河床低下しているのはなぜか。また、その河床低下を止めるために堰堤を造ったのか確認したい。
- ・柏原堰堤は河川管理施設であり、形態上は取水堰のようになっているが、上流に橋梁もあり床止めを目的に築造されたという記録がある。
- ・人為的な行為をしなくても動的平衡河床というのはできるが、河口部の土砂を浚渫するという行為を「動的」と言われているのか。

- ・動的平衡とは、維持管理をしているから、河床が見かけ上変化が少なくなっているという意味である。おそらく、浚渫量に相当する量が毎年生産されており、途中でとまったり、瀬が動くような形で、河口には到達していると思われる。
- ・スーパー堤防をつくる土砂はどこから持ってきているのか。また山を崩すということはないと思うがどういう状況か聞きたい。
- ・スーパー堤防の土砂のために山を切るということは、現在、考えていない。河口浚渫事業の土を活用したり、周辺での公共事業や、亀の瀬の工事から出てくる土砂を受け入れたりしているというのが実態である。
- ・昭和57年の降雨は、台風9号と台風10号という2つの降雨原因によるものであり、2日雨量で総量を決めておいて別のイベントに適應するという手法が、妥当な手法だろうかという議論をしないといけないのではないか。
- ・亀の瀬の地すべりと、奈良盆地を流れる諸河川が全部集中してこの本川に注ぎ込むことが、巨視的に見れば大和川治水の一番のウィークポイントだろうと思う。
- ・大和川本川に水が全部集まってくるという点で、本川が一番安全でなくてはならないと思う。奈良県民の悲願である亀の瀬を開くに当たっても、安全に将来流していかなければ、大阪側の理解は得られない。その点も踏まえながら計画を立てていかなければいけないと思う。
- ・大和川流域委員会は、直轄区間をターゲットにしているが、支川の治水、利水も視野に入れたようなものにしていただきたいと思う。
- ・総合治水対策の事業計画以降、社会情勢が変わったり、いろいろな問題が分かかってきたりしたので、新たな見直しはしないのか。
- ・今後、大和川流域総合治水対策協議会で計画の見直しについて議論していく必要がある。
- ・スーパー堤防の事業区域は河川沿いの長さで説明があったが、河川沿いの長さではなくて面積で考えるべきではないか。また、沿川での大規模開発、面整備等が起こらないところでのスーパー堤防の推進方策について考えるべきである。



第7回大和川流域委員会



# 大和川の紹介 ～環境～

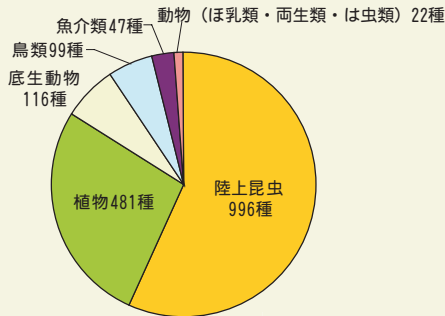
## ● 多様な生物環境がある大和川

「河川水辺の国勢調査」は、適切な河川管理の実施にあたって、河川に関する基礎情報の収集整備を図る目的で定期的、継続的に実施されている。

成果は計画の策定、事業の実施、河川環境の評価とモニタリングなどに利用される。

調査の対象となる動植物は、植物、動物、鳥類、陸上昆虫類、魚介類、底生動物である。

(H2～H12の調査結果) 植物100科481種、動物7目12科22種、鳥類13目33科99種、陸上昆虫類17目229科996種、魚介類9目16科47種、底生動物7綱17目57科116種の生息状況が確認されている。



□河川口域 (阪堺大橋周辺)



□下流域 (JR阪和線鉄橋周辺)



□下流域 (石川合流部周辺)



□亀の瀬域



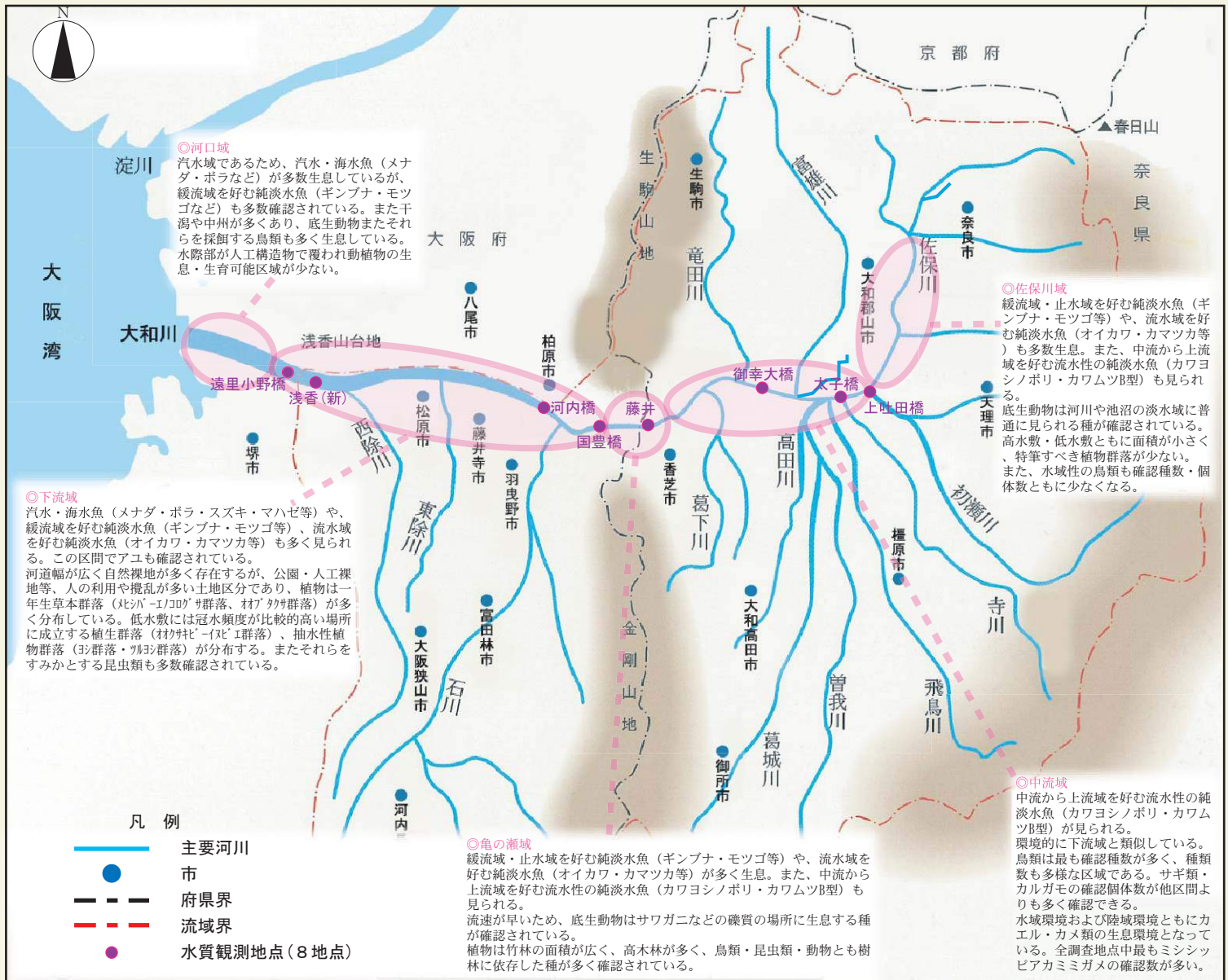
□中流域 (御幸大橋周辺)



□佐保川域



□大和川流域と水質、生物調査





## ●大和川の水質 (ア) 水質の歴史

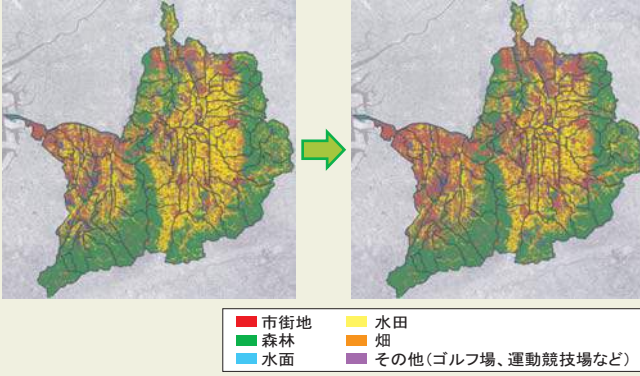
高度経済成長は都市化を広げ、大阪のみならず大和平野の全域で宅地等の開発がされている。都市化により排水が河川に集中し、多くの河川が生活排水路のようになってしまった。大和川ではその結果が顕著に現れた。

現在、流域から排出される汚濁負荷量のうち、80%以上が家庭から排出される生活系の負荷である。

□大和川流域の土地利用の変遷

昭和51年

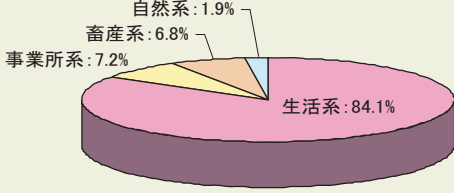
平成9年



□水質の経年変化：本川8地点平均BOD



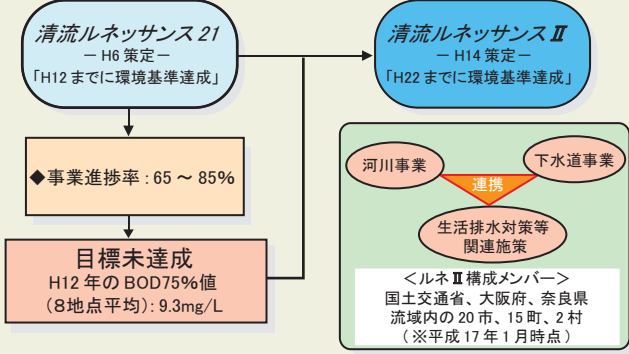
□大和川流域BOD排出負荷量の構成比 (H14)



BOD<ピーオーディー>とは水中の好気性微生物の酸化分解によって消費される酸素量のことで、水の有機物汚染が大きければその有機物を栄養分とする微生物の活動も活発になり、微生物によって消費される酸素の量も増加します。従って、BODが大きければ水中の有機物汚染が大きいことを示すため、水の有機物汚染の指標とされています。

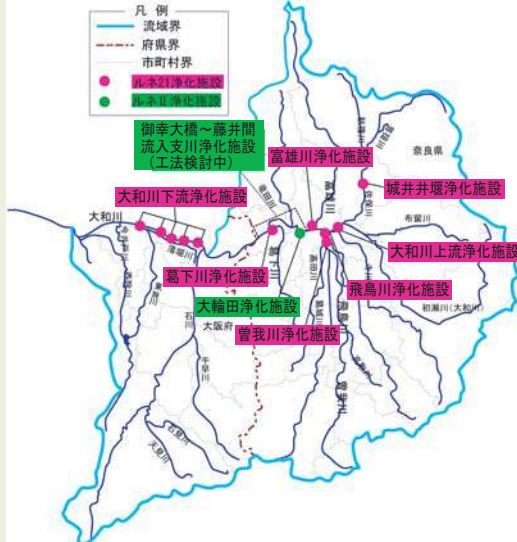
## (ウ) 大和川清流ルネッサンスⅡ

平成6年に策定された水環境改善緊急行動計画「大和川清流ルネッサンス21」を引き継ぐ形で、平成14年10月に「大和川水系第二期水環境改善緊急行動計画(清流ルネッサンスII)」を策定し、平成22年までに環境基準を達成するように、引き続き水質改善に取り組んでいる。また大和川の再生を目指して、Cプロジェクト(水環境)の策定作業が進められている。



## (エ) 河川浄化施設

□河川浄化施設



大和川ではさまざまな河川浄化施設の整備を行い、水質改善に取り組んでいる。

□柏原地区浄化施設「瀬と淵浄化方式」



- ◎「瀬と淵浄化方式」  
大和川下流浄化施設(長吉長原地区、第二運動広場地区、河川敷公園地区、西運動広場地区、柏原地区)
- ◎「礫間接触酸化方式」  
富雄川浄化施設、飛鳥川浄化施設

- ◎「上向流接触酸化方式」  
曾我川浄化施設
- ◎「薄層流浄化方式」  
大和川上流浄化施設
- ◎「直接接触酸化方式」  
城井井堰浄化施設(佐保川)

## (オ) 啓発活動



大和川博士講座



清掃活動

# 大和川の紹介 ～利水～

## ●雨が少なく流量も少ない大和川流域

大和川流域は、年間の降水量が約1,350mmと全国平均の約1,718mmを大きく下回る少雨地帯である。

雨の少ない大和川流域では、干ばつや用水不足の対策とともに、豊穡な大地の形成に向けた河川の付け替え等、様々な工夫が古代から行われてきた。

### (ア) 溜池の築造

□大和平野の溜池分布

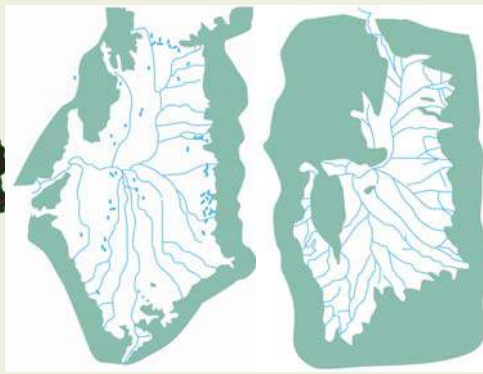


### (イ) 河川の付け替え

大和川の上流では、利水を目的に12世紀前後に付け替えが盛んに行われたと考えられている。大和川の支川は条里に一致した流路をとり、自然傾斜に反したものが多く、人為的に造られたことが確認されている。

下流では、新大和川への付け替えにより旧川筋や池は新田に生まれ変わった。

①上流の付け替え



□現在の奈良盆地の河川 □奈良盆地の旧河道の復元

②下流の付け替えと旧大和川筋の新田



## ●他水系に依存する大和川流域の水利用

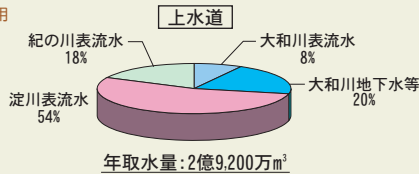
現在の大和川流域の年間水利用は、上水道が2億9,200万 $m^3$ 、工業用水が1,500万 $m^3$ 、農業用水が1億3,500万 $m^3$ で、総量は4億4,200万 $m^3$ である。それぞれの内訳は下図のようである。

上水道の54%を占める淀川表流水とは、淀川にあるダムや琵琶湖の水である。また、8%の大和川表流水とは、支川の石川や奈良県上流域にあるダムを水源としている水である。

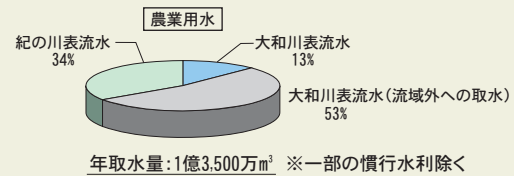
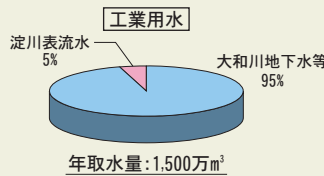
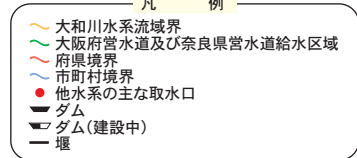
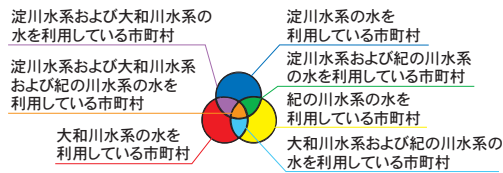
工業用水は、大和川の地下水がほとんどで95%を占めている。

農業用水では、34%を紀の川からの表流水、すなわち吉野川分水に依存しており、大和川の表流水は13%となっている。また、53%を占める大和川表流水(流域外への取水)とは、大和川の付け替え地点である築留地点において取水され、大阪市、東大阪市、八尾市を流れる河川の水源となっている水である。

□水利用



□水道用水の他水系への依存状況



## トピックス

【大和川の水質～41年振りに環境基準レベルをクリア。加えて改善幅は全国No. 1～】

平成17年9月2日に発表されたBOD値による全国の一般河川水質ランキングで、過去、ワースト1位、2位が続いていた大和川が、平成16年はBOD年平均値ではあるが4.6mg/Lと、環境基準類型指定以降初めて環境基準レベルの5mg/Lを下回り、3位となった。水質改善状況をBOD値の10年間の改善幅で比較すると、大和川が最も大きくなっている。

【大和川の再生を目指して～大和川水環境サミットの開催、大和川水環境協議会の設立～】

大和川の流域では、大和川付け替え300周年を機に大和川再生の気運が高まり、平成17年3月5日には大和川水環境サミットが開催された。サミット宣言では、大和川再生に向けた「Cプロジェクト」の取り組みが謳われた。このうち水環境の再生を実現する新たな組織として「大和川水環境協議会」を設立する運びとなり、平成17年9月30日に「大和川水環境協議会」が設立された。

【全国初の生活排水対策社会実験～本川8地点平均のBODは社会実験前に比べやや改善～】

平成17年3月6日、大和川流域で一斉に「生活排水対策社会実験」を行った。この実験では大和川流域215万人のみなさんが生活排水対策を普段より心がけることで、どのくらい水質が改善するかを確かめたもので、全国初の試みとなった。実験に際して流域全体でさまざまな広報活動が行われ、流域のみなさんに大和川の水環境を考えていただく大きな機会ともなった。流域内人口約215万人の約15%が参加したほか、地域の方々が採水に協力するなど、水環境改善の意識向上に絶好の機会となった。実施結果は、大和川本川8地点の平均BOD値は、今後の更なる検証は必要であるが、実験前10.2mg/L→実験後9.5mg/Lと約7%の効果を確認された。

大和川流域委員会ホームページアドレス

<http://www.yamato-river.org/>

【問い合わせ先】

大和川流域委員会庶務担当 株式会社アイ・エヌ・イー 関西支店  
 〒532-0011 大阪市淀川区西中島5-7-18 アストロ新大阪ビル202号  
 TEL; 06-6885-7585 FAX; 06-6885-6177  
 E-mail; shomu@yamato-river.org



この印刷物は再生紙を使用しています。 2006年2月発行